

| | | | |
|---------|---------------|-------------------|--|
| 科目担当者氏名 | | 科目担当者連絡先（メールアドレス） | |
| 浅川 達人 | | | |
| 連絡責任者氏名 | | 科目設置機関名 | |
| 浅川 達人 | | 明治学院大学 社会学部 社会学科 | |
| 授業科目名 | 科目認定番号 | 受講者数 | |
| 社会調査実習 | MJGa-130801-0 | 11人 | |

I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

今回の調査実習は受講者が11名と少数精鋭であったことが奏功し、中身の濃い調査実習を行うことができたと感じている。各グループの構成員を3~4名と少人数に抑えられたため、フリーリーダーとなる学生もおらず、非常に熱心に実習に取り組んでもらうことができた。

II. 調査の企画・設計（デザイン）

1. 調査のテーマ／領域：

食料品アクセス問題の動向とその解決策に関する調査

2. 調査の内容／概要：

実習生を3グループに分け、グループごとにテーマの設定、先行研究のレビュー、仮説構築を行い、仮説検証に必要な調査項目を考えるという手順に基づいて設定した。各グループのテーマは、食料品アクセス問題における「ソーシャルアクティビティの影響」、「ソーシャルネットワークの影響」、「移動手段の影響」を考察するというものであった。

3. 調査の範囲／対象（量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入）：

母集団は東京都千代田区神田に居住する全世帯とした。標本抽出は、エリアサンプリングによって行った。抽出は2段階に分けて行った。まず、東京都千代田区神田に該当する住宅地図を50のセルに分割し、そこから20セルをランダムに抽出した。次に各セル内からスターティングポイントをランダムに設定し、「何軒おき」という形で等間隔に35世帯を抽出した。これら2段階の抽出作業により合計700世帯を無作為に抽出した。

4. 主な調査項目：

調査項目は大別すると、基本属性、ペットの有無、生鮮食料品の買い物、食事内容、地域活動への参加、家族との関係、地域の方との関係、生活習慣または健康状態の8項目であった。

III. データ収集の方法と結果

5. データ収集（現地調査）の方法：

配票、回収には郵送法を用いた。

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

調査は2013年8月に行った。調査員は受講者全員、すなわち11名であった。

7. 収集したデータの量と質への評価（量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入）：

有効回収票数は82票であった。マンション1棟まるごと拒否という事例が多く、そもそも調査対象者の手に調査票が渡らなかった事例も多いことが示唆された。

IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析／解釈の方法：

主にクロス集計、平均値の差の検定、重回帰分析、分散共分散分析などを用いてデータ分析を行った。

9. 調査の成果（調査から得られた主な知見など）：

たった82票のデータから、神田地域で暮らす方々の生活を推定することは不可能であるため、各グループのファインディングスをここでまとめることは差し控える。

10. 報告書刊行の予定と概要：

社会学科の全実習クラスの報告書をまとめ、『社会調査実習報告書Vol.30』として2014年3月に刊行する。ただし、この調査報告書は「社会調査実習」の報告書であり、30回の実習の中で実習生がどれだけ学習を深めたかを示すものとして読んでいただきたい。